

死んだ王妃は

二度目の人生を楽しみます2

お飾りの王妃は必要ないのでしょう？

CHARACTERS
登場人物紹介

ニルマ

シルウィオの母方の祖母。
各地を転々としていて、
所在がつかめない。

ジェラルド

アイゼン帝国の宰相。
かつては騎士団長を
務めていた。

グレイン

シルウィオの護衛騎士。
うっかりしているところもあるが、
実力は帝国一。

ヴォーレン・
バジルア

バジルア公爵家の当主。
ジェラルドの前の宰相で、
復帰を狙っている。

マーガレット

バジルア公爵令嬢。
シルウィオの側妃に立候補する。

シルウィオ

アイゼン帝国の皇帝。
なにもかもつまらないと思っていたが、
カーティアに出会って愛を知った。

カーティア

元・グラナートの王妃であり、
現・アイゼン帝国の皇后。
病死の後、時を遡って運命を乗り越え、
シルウィオと結ばれた。

リルレット

カーティアとシルウィオの愛娘。
魔法の才がある。

目次

死んだ王妃は二度目の人生を楽しみます2

7

番外編 コッコちゃんは幸せに過ごします

269

死んだ王妃は

二度目の人生を楽しみます2

お飾りの王妃は必要ないのでしょう？

プロローグ

『誰か……助け……』

暗い室内で、私は病魔に侵された身体で手を伸ばす。

荒い呼吸のせいか喉に血が滲み、口内に鉄の味を感じながら助けを乞う。

『苦し……誰か、薬を……』

必死に訴えかけようとも、部屋の外から聞こえるのは嘲笑のみだった。

『薬だって、取ってきてあげなよ』

『嫌よ、だって意味がないじゃない。陛下から言われたのよ、看病は必要ないって……陛下からすれば死んでくれた方がいいみたい。愛していない王妃なんてね?』

嘘だ――

そう思いたくても、外から聞こえてくる嘲りの声は消えない。

愛されぬ王妃として、病魔に侵されてもろくな治療を受けられず、死を望まれる。

今まで王を支えてきた王妃の私は、王からの寵愛を失って使用人にすら蔑きずまれているのだ。

『はは……なんだったの。私の人生って』

悲観の中で、私はそんな言葉を吐きながら……やがて呼吸も静かに途絶え――

パタンッ!! つと、読んでいた小説を閉じる。

「ふう……」

私――カーティアは、小説を置いて一息つく。

いやあ、意外にも重い話でついつい昔を思い出してしまう物語だった。

「ちよつとこの小説、私と同じ境遇すぎて驚いちゃった」

かつて似たような境遇にいた私は、実は一度死んでいる。

なんて、誰に言っても信じてくれるはずがないけれど、これは本当の事だ。

私は愛されぬ王妃として病気で一度死んだけど、時間が戻った先で二度目の人生を歩み出した。

そこからどうなったか?

もし聞かれたら、色々と複雑でなんと答えればいいか。

ひとまず言えるのは、数多くの出会いがあつて……あの不幸から今の私は――

「おかさま、きょうのおみずやりのじかんだよ」

そんな可愛らしい声と共に、小さな手が私の手を引いた。

読んでいた小説から視線を外して、私の膝程の背丈のその子へ笑いかける。

「リルレット、教えてくれてありがとう。今日も一緒に畑に水やりに行く?」

「うん!」

この子はリルレット、私の大好きな娘だ。
淡い金色の髪に、ぽってりとした可愛らしい頬。

そんな愛されフォルムの顔でキラキラ輝く、宝石のような紅い瞳が私を見つめる。
ああ、今日も私の娘はすごくかわいい。

「おかさま、みずやりいこ！」

リルレットに手を引かれて、日課の家庭菜園へ水やりに向かう。

澄み渡る青空、頬を撫でる優しい風、娘との二人の時間は穏やかで幸せだ。

畑にたどり着いて植えている野菜の成長を見ると、思わず口角が上がる。

あと少しで収穫できそうだ……それに私が植えたタンポポも咲き始めており、嬉しさで心が躍る。

「コケコ！ コケ！」

水をやっていたら、一羽の鶏が私の足元を駆け抜けていく。

その姿を見た私は、咄嗟にその子を捕まえた。

「コッコちゃん、おはよう」

「コケケ」

この子はコッコちゃん。

この地に来てからずっと一緒に可愛らしい鶏で、私の家族だ。

そんなコッコちゃんに朝の挨拶をするが、私には見向きもせずに畑の土にいる虫を目的に一心不乱に突いている。

……もう数年の付き合いなのだから、少しは私を見てほしいのだけどね。

「コケケ！」

「こーこ、りるもいつしよにむしろさんがす！」

コッコちゃんは私たちを見ながら勢いよく走り回り、リルレットが釣られて駆ける。

その光景を見ながら微笑んでいると、ふわっと優しい風が吹いた。

思わず瞳を閉じて、すぐに開ければ……こちらへ向かってくる一人の男性が見えた。

「つ……来てくれたのね。シルウィオ」

私は彼の姿を見て、思わず緩んでしまう頬と共にその名を呼ぶ。

畑に立つ私に歩み寄ってくる男性。

銀色の髪が風でなびき、その前髪からリルレットと同じ紅の瞳が鋭く垣間見える。

アイゼン帝国の皇帝陛下——シルウィオ・アイゼン。

それが彼の肩書であり、そして……

「おとさま！」

リルレットが駆け寄り、呼びかけた言葉通り……彼はリルレットの父親。

そして私の夫である。

初めてこの光景を見た人は驚くだろうな。

まさか家庭菜園をしている私が……帝国の皇后だなんて。

もつと言えば、この畑だって帝国のお城の庭園内の一角なのだから。



冷遇されていた王妃から、こうなると誰が予想しただろうか。
だけどこれこそ、私が二度目の人生で手に入れた幸せた。

「カティ、リル。こっちに」

リルレットに抱きつかれ、それを片手でひょいと抱き上げたシルウィオが私を見つめる。
もう片方の手で空間を示し、そこに来てほしいと目線が告げていた。

「おとさま」

「リル、お前は今日も可愛いな」

「ふふ、シルウィオもすっかりお父さんですね」

そう呟きながら傍に寄れば、彼の手が私を抱き寄せる。

リルレットとまとめて私をぎゅっと抱きしめた彼は、その紅の瞳を細めた。

「カティのおかげだ。君がいてくれるのが、俺にとって一番の幸せだから」

「ふふ、嬉しいよ。シルウィオ」

額をコツンと合わせて笑い合う私たちを見上げ、リルレットも嬉しそうに手を伸ばす。

「おとさま、おかさまだけずるい、リルもいっしょにぎゅつするの！」

抱きしめてくるリルレットを見つめながら、シルウィオはしばらく沈黙する。

そして少しの間を置いて、再び私たちを強く抱きしめて呟いた。

「ここには天使しかいないな。この可愛さ。国を挙げて称賛すべき二人だ」

「い、言いすぎですよ、シルウィオ」

シルウィオの言葉に笑いながら……腕の中で笑う娘が産まれるまでの日々を思い出す。かつては死を望まれた王妃だった私が、二度目の人生で幸せを手に入れるまで。そして……皇帝である彼と仲を深めていった記憶を、鮮明に思い出していった。

第一章 皇帝として、皇后として

清々しい程の晴天に、ほうっと息を吐く。

身体も元気だし、健康のための軽い運動をして、身体を伸ばす。

「よし……」

大きく息を吐いて、私は庭園へと向かった。

ここ、アイゼン帝国の城内に備えられた庭園には、私だけの菜園がある。

育てている作物の様子を見に行こう、それにあの子にも餌をあげないといけない。

「おはよう、コッコちゃん」

「コケコッコー！ コッ！ ココ！」

私の元へパタパタと駆け寄ってきたのは、鶏のコッコちゃんだ。

とってもフワフワのフォルムが愛らしい、元気な姿を抱き上げる。

どうして鶏がアイゼン帝国の城内にいるのか？

それを聞かれたなら答えは簡単……私が毎日、卵を食べるために鶏を望んだからだ。

「でも今は、コッコちゃんも大事な家族だよ」

「コケー！」

元気に挨拶をするコッコちゃんを抱きしめながら、私は青空を見上げる。

「このすっきりした晴天……まるでこの帝国に來た時みたいだね。コッコちゃん」

眩きながら、私はつい思い出す。

このアイゼン帝国に來る前までの経緯と、こうして平穏な生活を手に入れるまでの事を……

私——カーティアは、元はグラナート王国の王妃であった。

しかし、夫であり国王であったアドルフに虐げられ、側妃のヒルダに寵愛を奪われていた。

私がいくら政務をこなしてもアドルフからの評価は得られず、いつしか私は彼に死を望まれた。

そして、そんなストレスしかない環境にいたせいか……

私は——二十五歳となった年に、病気で死んだ。

「でもまさか、二度目を生きられるなんて凄い奇跡だよね。コッコちゃん」

コッコちゃんに伝えた通り、私は確かに死んだ。なのに三年前の二十二歳の誕生日に時間が戻っていたのだ。

期せずして手に入れた二度目の人生、虐げられて死を遂げた私の記憶を継いだのだから、やる事は一つだけだった。

そう、新たな人生を謳歌するため、グラナート王妃の座なんてさっさと捨ててしまったのだ！

でも私が思う以上に私は他国から評価されていたようで、王妃を辞めた瞬間から転がるような展開でアイゼン帝国の皇后となる事になったのだ。

まさに驚天動地の出来事の連続を過ごし、数多くの問題はあったが、今は皇后として望む生活を送る事ができている。

「カーティア皇后様、ここにおられたのですね」

ふと、昔の事を思い出していたら、背後から声をかけられる。
振り返ると、城内で給仕を務めている使用人が立っていた。

「お身体は大丈夫でしょうか。病み上がりですので……あまり出歩いていると、皇帝陛下がご心配なされますよ」

「大丈夫よ、治ってから一ヶ月も経ったのよ？ 外に出ないと気が滅入るわ」

使用人が心配するのは、私がつい一ヶ月前まで病魔に侵されて死の淵に瀕していたからだ。

一度目の死の原因と同じ、名もなき病によって苦しめられて覚悟を決めていた。

だが……あるキッカケのおかげで救われて、今はすっかり元気になれている！

「見ての通りすつごく元気だから、心配しないで」

「そ、それなら良いのですが」

「そうだ、せっかく来たのだから畑で採れた野菜でもいいかが？ 自信作なの」

「よ、良いのですか！ カーティア様の育てておられる野菜を以前いただいた際も、うちの子どもがとても美味しいと喜んでおりました」

まあ、なんて嬉しい感想だろうか。

二度目の人生で趣味のように始めた菜園だが、こうして評価をいただけると励みになるものだ。

「うふふ、持っていきなさい。もつと持っていきなさい」

「お、多いですよ皇后様！ どこにそんなお力が!?」

戸惑う使用人をよそに、私はどんどん収穫した野菜を渡していく。

こうしてご覧の通り、死に瀕した事が嘘のように今は快調だ。

「ふう、収穫終わり。この後は本でも読も——」

「カティ」

声が聞こえた瞬間、ふわりと身体が浮き上がる。

後ろから抱きしめられて、足が浮いたのだ。

誰が来たのか？

振り返った際に横目で見えた銀系の髪色ですぐに分かった。

「シルウィオ！ 帰ってたの？」

「ああ」

太陽を反射して輝く銀色の髪、どこでも異彩を放つ深紅の瞳。

美麗な無表情のまま、私を抱き上げた彼は……シルウィオ・アイゼン。

彼こそが私の夫で、このアイゼン帝国の皇帝陛下だ。

「シルウィオ……あ、足が浮いているから。下ろして」

「駄目だ」

出会った頃の彼は私を『お飾りの妃』と呼び、鉄のような無表情を崩さなかった。アイゼン帝国の貴族たちからも恐れられ、その紅の瞳を見れば誰もが畏怖^{いふ}していた。そんな彼が今では……

「カティのため、頑張ってきた。だからこれぐらいいいだろう」

「ふふ、じゃあ……仕方ないですね」

今でも無表情なのは変わらないけれど、彼は私を抱きしめたまま嬉しそうにしている。その変わった姿に、私も愛しい気持ち^いが溢れてくるのを感じた。

「ん」

彼の大きな手が私の黄金色の髪をかき分け、頬に添えられる。

その手を引き寄せるようにして、彼はそつと唇を重ねた。

口付けしたまま私を地面へと下ろし、その柔らかな唇が離れていく。

「外に出ている間、ずっと会いたかった」

「ふふ、私もだよ。でも今日はどこに行っていたの？ 昨日の夜から出ていたみたいけど」

「……ゴミを片付けてきただけだ」

シルウイオが冷たい口調で呟いた途端……庭園内に叫ぶような声が響きわたった。

「お、お許しください！ シルウイオ陛下！ 私は魔が差しただけなのです！」

「黙ってる！」

声の主へと視線を向ければ、見知らぬ貴族が騎士に連行されている。

あ……あの連行している騎士は私もよく知っている、シルウイオの専属護衛騎士——グレインだ。短く切り揃えられた髪に、快活な青年らしさもありながら、整った顔立ち。

私の前ではいつだって笑顔で、どちらかといえば護衛騎士らしからぬうっかりさんだ。

しかし今の彼は騎士の仕事だからだろうか、いつもの笑みを消して怒気を込めた表情で見知らぬ男性を押さえつけていた。

「すみません、シルウイオ陛下。貴族牢へ連行するにはこの道しかなく……カーティア皇后様とお時間を邪魔してしまいました」

「いい。さつさとそいつを片付けておけ」

「ま、待ってください！ 我がブルックス伯爵家が帝国へ与えてきた功績の数々を考えれば、私の罪にも恩赦^{おんしや}をいただいても良いではありませんか！」

ブルックス伯爵家と聞いて、私は思わずシルウイオへと視線を注ぐ。

最近……他国との交易にて大きな利益を挙げ、その名を轟^{とどろ}かせている伯爵家だ。

「なにかあったのですか、シルウイオ」

「……」

シルウイオは言いにくそうに黙っている。珍しいなと首を傾げた時、しわがれているが、強く芯の通った声色が私を呼んだ。

「私が説明いたします。カーティア様」

その声の主はアイゼン帝国の宰相であるジェラルド・カイマン様だ。

厳格ながらも普段は優しく私に微笑みを向けてくださるジェラルド様が、表情に怒りを交えながら、連行されるブルックス伯爵を睨んだ。

「その者は我が国に許可なく依存性のある薬物を輸入しており、それを売りさばいていたのです」
なんとという悪党だろうか。どの国でも違法な薬物が流入せぬよう頭を悩ませている。

それを貴族が自ら迎え入れたなど、あつてはならない大罪だ。

「加えてその者は、信じられぬ毒物にまで手を出したのです」

「毒、ですか？」

「ええ、不妊にいたる毒。それをこの国に輸入し……………他でもない、カーティア様に投与しようと画策していたのです」

「っ!!」

「おおかた…………自分の娘をシルウィオ陛下へ献上するためでしょうな」

身がキュッと締め付けられるような、背中に悪寒が走るような感覚に襲われた。

前の人生で寵愛されぬ王妃として過ごしていた私には、まるで関係がなかった話だが…………

子を産めぬように毒を盛るといった暗躍や、皇位を巡る影の争いは決して珍しい話ではない。

どの国でも当たり前にある事だったと思ひ出す。

「そうだったのですね…………」

「っ!! カーティア様…………ご不安にさせて申し訳ありません。当然ながら私の手の者から事前に情

報を入手し、貴方に危害が及ばぬうちに対処いたしました」

流石はジェラルド様の情報収集能力だ。

毒を盛られるかもしれない事未然に防いでくれた感謝しかない。

「俺がいる。カティへ危害など加えさせるはずがない」

シルウィオは小さく呟き、そのままブルックス伯爵へと歩み寄る。紅の瞳で冷たく見下ろし、怒気を込めた声で問いかけた。

「ブルックス、貴様が手を出そうとしたのは帝国の華だ…………その命一つで償^{ぐな}うには足りないな」

「ち、違います、陛下。わ…………わわ、私は本当に善意で、この国を思って行動したのです」

「は？」

不愉快だというようなシルウィオの声に気付かず、ブルックス伯爵は言葉を続けた。

「カーティア皇后ですが…………つい一ヶ月前まで死に瀕していたというではありませんか！ 未来の御子を産む身体が病弱などあつてはならないのです」

「……」

「ですから。私はただ…………カーティア皇后には子を諦めてもらい、健康的な私の娘を——うぐっ!!」

ブルックス伯爵の言葉が詰まると同時に聞こえたのは、声にならぬ悲鳴であった。

シルウィオがその手でブルックス伯爵の首を掴んだのだ。

手に血管が浮かぶ程の力で締め付けており、見るだけで激痛だと分かる。

首の氣道を塞がれたブルックス伯爵は声も出せずに悶えていた。

「あ……あぐっ!? がえ……っ!」

「……不愉快だ」

「ああ……ああ、へ、陛下」

「貴様如きが、俺の華に手を出すとは……本当に不愉快だ」

「や、やめへっ!! あぐっ!!」

ゴキッと鈍い音が鳴り響き、ブルックス伯爵の両手がだらりと垂れ下がる。

シルウィオはその身体をどさりと地面に投げ捨て、鮮血の如き紅い腫で見下した。

その姿を目の当たりにしても、私には恐怖も驚きもない。この姿こそが本来の彼だ。

アイゼン帝国はかつて、貴族の腐敗によって民が多く犠牲を被っていた。

しかしシルウィオが皇位を継承して早々、その辣腕を振るい、多くの腐敗貴族を処罰した。

そこに慈悲はなく、血で血を洗うような肅清に……いつしか彼は恐怖の対象となった。

アイゼン帝国の皇帝——シルウィオ・アイゼン。

彼がこの国の貴族に血染めの皇帝として畏怖されている事は、私も承知している。

でもね……彼はちゃんと皇帝だという事も知っている。

「ブルックスを貴族牢に連れていけ。殺してはいない」

「え? ほ、本当ですか?」

グレインは騎士として皇帝の行為に口を挟まず、一部始終を見守っていた。しかし地に倒れ伏し

たブルックスが生きているという言葉は流石に信じられなかったようで、驚きながらその脈を測る。

「ほ、本当ですね。脈がある……」

「こいつからは薬物の件で尋問すべき事が多い。まだ殺しはしない。その後になるべき裁きによって死罪とする」

「了解です、陛下。ブルックスは俺が貴族牢に連行いたします」

シルウィオはやっぱり、激情にかられて先の事を考えずに殺しなどはしない。

皇帝として然るべき決断をして、冷静に対処してくれたと、私は安堵の息を吐く。

「すまない、カティ。見苦しい言葉を聞かせた」

「いえ、私は……」

「カティは俺だけのものだ。なにがあっても、絶対に離す気はない」

ブルックス伯爵の蔑みなど気にするなど、言外にそう伝えてくれる彼の愛を感じて胸が弾む。

コクリと頷いて返答すると、シルウィオは無表情のまま自らの手を見つめた。

「あいつを触った手でカティに触れたくない。少し手を洗ってくる」

「へ? わ……私は別にいいのに」

なにせ私だって手を洗ったとはいえ、先程まで細いじりをしていたのに。

そう思っただけの発言だったが、シルウィオは踵を返して小さく呟いた。

「俺が嫌なだけだ。カティに……あんな男の何かを付けたくない」

そう言っただけで手を洗いに向かうシルウィオの姿を見た者は、本当に恐れられている皇帝なのかと疑

うだろう。

私にだけは、こうして気遣うような振る舞いをしてくれるのだ。

「シルウィオ陛下は、本当に変わられましたね」

傍にいたジェラルド様が笑みを携え、心の底から嬉しそうに呟く。

私は「はい」とその言葉に同意した。

「ブルックスの件も、本来ならば私が捕らえに行く予定でしたが……あの男がカーティア様を狙っている聞いて、目の色を変えて陛下自ら向かわれたのです」

「そ、そうだったんですね！」

「そこからはもう、獅子奮迅の活躍だったと騎士から聞いております。ブルックスは裏社会の人間を護衛にしていたようですが、陛下の前では塵芥のように蹂躪されていたと報告を受けました」同行していた騎士たちが仕事をする暇もなかったと嘆いていたと、ジェラルド様は苦笑する。

「皆、今のシルウィオ陛下を敬愛しております。畏怖の気持ちも恐怖も、いまだ我らの心にあるのは確かです。ですが……やはり変わられたと身近な者は感じているのです」

「ジェラルド様……」

「誰かのために激情を灯す陛下など、考えられなかった。それも全てはカーティア様が皇后となつてくださったからでしょう。きつと陛下は貴方となら、これからも変わっていかれるはずです」

ジェラルド様は賛辞の言葉と共に、「改めて感謝をさせてください」と告げて私に頭を下げる。

いや……私は本当にアイゼン帝国で好き勝手に生きて、畑をいじっていただけなのに。

なんだかむずがゆいなど、感謝の言葉にとりあえずペコペコしていると。

「待たせた、カティ」

手を洗ったシルウィオが帰ってきて、私の手を握る。

「茶を飲もう。カティと一緒にいい」

「ふふ、そうですね」

相変わらず、無表情のままだけ嬉しそうなのが伝わってくる。

そんなシルウィオに微笑んでいると、彼は立ち止まってジェラルド様へ顔を向けた。

「ジェラルド……」

「は、はい！ なんてでしょうか。シルウィオ陛下」

「此度の事、大儀だった。お前のおかげでカティの身は救われた。感謝する」

「っ!! あ、ありがたきお言葉です……身に余る光栄を、感謝いたします」

「カティは本当の意味で帝国の華となった……美しい華には虫が寄る。全て処分するぞ」

「はい。カーティア様の御身、我ら帝国の威信にかけてお守りいたします！」

「共にだ。俺とお前たちで、共に帝国の華を守るぞ」

少し前のシルウィオなら考えられぬ、家臣を素直に頼る言葉。

それを聞いたジェラルド様は驚きに顔を上げたが、すぐに笑みを浮かべて頷いた。

「ええ！ 共に！」

再び歩き出したシルウィオに手を引かれながら振り返れば、ジェラルド様が『言った通りでしょ

う?』と言いたげに微笑む。

家臣が喜ぶ程に、彼は孤高の皇帝から変わったのだと確かに思えた。

私たちは手を繋いだまま、いつも二人で過ごす薔薇園近くのテーブルセットに横並びで座っていた。

シルウィオを見つめると、彼は照れたように視線を逸らす。

「カティ」

「ん? どうしたの?」

「これを」

緊張した面持ちの彼が渡してきたのは髪留め——深紅の宝石が輝く、色鮮やかなリボンだった。

「これ、くれるの?」

「拾っ……いや、カティのために買ってきた」

前は照れ隠しで濁していたのに、今では正直に言ってくれるようになった事に成長を感じ、微笑ましく思う。

私は農作業のためにくくっていた髪を一度ほどくと、受け取った髪留めでまとめ直した。

「どう……かな?」

「……」

「ちゃんと言って、シルウィオ」

「綺麗だ。誰にも……渡したくない」

「ありがとう、シルウィオ……私も大好きだよ」

「っ!!」

一ヶ月前に病に倒れた時は、シルウィオに多くの心配をかけてしまった。

だから先程のブルックス伯爵の言葉で、少し心臓が跳ねたのを思い出す。

『お飾りの妃』として私を求めた以前までのシルウィオであれば、病弱な妃には価値がないと思うかも。

そんな不安もあったけど、シルウィオは私を気遣い、今も優しく抱きしめてくれる。

それが……それがたまらなく安心できて、嬉しいんだ。

「カティ……」

「どうしたの?」

「好きだ」

緊張したように、私の手をギュッと握ってくるシルウィオの言葉を聞いて思わず微笑む。

私が言おうとしていたのに、彼が先に言ってくれたみたいだ。

「うん……私も大好きですよ」

私がシルウィオの手を握り返すと、彼も小さく微笑んだ。

私にだけに見せてくれる笑みを浮かべ、優しい紅の瞳を向ける。

「……嬉しい」

そう呟き、まるで子犬のように肩を寄せてくる彼に心が惹かれる。

鼓動は大きく高鳴るけど、二人で過ごす時間はほわほわとした雰囲気で心地よく過ぎていく。彼の皇后になれて、改めて幸せだと思い知らされたみたいだ。

第二章 認められなくとも、私が皇后です

満月の月明かりが窓から差し込み、廊下を照らす。

静けさを感じる城内を私はシルウィオと共に歩み、彼の部屋へ向かっていた。

「足元は、大丈夫か」

「う……うん」

昼間もずっと一緒なのに、夜になるとどうして緊張してしまうのだろうか。

照れや緊張を感じている間に、すぐに部屋に辿り着く。

シルウィオの部屋は燭台がほのかに灯るだけで、少し薄暗くて、私たちは自然と寝台に寄り添って座った。

「カティ……手」

「……うん。シルウィオ」

いつも通りにシルウィオは私の手を握り、そっと指を撫でた後に優しいキスをくれた。

「ん……」

「カティ……」

「シルウィオ、明日は早いのでしょうか？ 寝ないと」

「もっと、こうしていたい」

彼はどうやら、二人の時間を長く過ごしたいらしい。

望み通り手を繋ぎながら話をして時間を過ごすうちに、すっかり夜は更けてくる。

「そろそろ、寝ようか。シルウィオ」

「……」

ふいに、優しく肩を押されて私は寝台へと倒れる。

何人も寝られそうな広い寝台だけど、私の隣……すぐ近くにシルウィオは横になった。

「また、明日」

「ふふ、そうですね。また明日」

そのまま、彼は羽毛の布団をかけてくれて、温かな感覚に包まれた私を眠気が襲う。

燭台の火が消されて、視界は暗闇で覆われた。

「……」

沈黙の中、ゆっくりと瞳を閉じようとした時だった。

「カティ……」

「ん？ どうしました？」

「……こっちに来い」

シルウィオが私に声をかけ、手を引いて身を寄せた。

月明かりの差し込むほの暗い部屋の中で、彼の深紅の瞳は鮮明に見えた。少し緊張した面持ちなのが、近くだとよく分かった。

「今日はこれで寝る……いいな」

「いいよ。シルウィオ……」

「ん」

私は抱きしめられた勢いに任せて、シルウィオへと口付けをした。

そうすれば、彼は嬉しそうにもっと強く抱きしめてくれるから。

「ふふ、こうして寝るのは初めてですね」

「……」

「ちよつと、緊張します」

「そう、だな」

彼の胸に顔をうずめれば、ドクドクと大きな鼓動が聞こえてくる。

どれだけ緊張しているのかを感じて、私は思わず笑ってしまった。

やっぱり、緊張していたのは私だけでないみたいだ。

それが嬉しい。

「寝られますか？」

「……カティと一緒に寝なくてもいい」

「それはだめ、ほら目を閉じて」

彼に抱きしめられながら、私も目を閉じる。

お互いの鼓動はやがて収まっていき、心地よい沈黙が部屋に広がりはじめた。

シルウィオは疲れもあつたのか、少しずつ呼吸が深くなり、寝息へと変わっていく。

「……」

こうして共に寝ていると、改めて私たちは夫婦なのだと実感が湧く。

いずれ夜伽の時は、来るのだろうか。

そ、それまでに、こうして共に寝るぐらいの事には慣れておかないと。

シルウィオとの子ども……考え始めれば、少しの不安が胸に宿る。

『つい一ヶ月前まで死に瀕していたというではありませんか！ 未来の御子を産む身体が病弱など

あつてはならないのです』

ブルックス伯爵が言っていた言葉が脳裏をよぎる。

やっていた行為は最低最悪だけど、あの言葉にドキリとした自分がいたのは事実だ。

病魔に侵された私は、子を宿して無事でいられるのか。

（私で……大丈夫なのだろうか……）

前回の人生では望めなかった幸せ。

経験のない不安を抱えながら、私は眠りの世界へと落ちていった。

好きな人と寝るのは思った以上によく眠れるようだ。

翌日は目覚めが良く、私はいつも通りに庭園で畑作業をしていた。

シルウィオは政務中だが、その間は護衛騎士のグレインが傍に控えてくれている。

何かがあつてはならないため、帝国最強の騎士であるグレインを私の護衛にと、シルウィオが判断してくれていた。

「カーティア様、今日も畑作業ですか」

「はい、ジェラルド様に頼んで堆肥たいひを持つてきてもらいましたから。これを撒きます」

畑の近くに山のように積もった堆肥たいひは畑の肥料であり、家畜の糞などを発酵させた物だ。

臭いは少しキツイけど、畑の実りは格段に良くなるようで、今から期待が膨らむ。

「懐かしいですね。俺の実家の周りも……この堆肥たいひの匂いがしていましたよ。臭いので兄弟が泣くんですよね」

「グレインは平民生まれだったのですよね。なら畑作業などは慣れているの？」

「いえ、幼い頃にジェラルド様に剣の腕を見込まれて家を出たので……農作業なんかはなにも知りません。なので俺も農作業を手伝っていいですか？ ちょっと経験してみたいです！」

私はグレインと共に、そんな世間話をしながら畑作業をしていく。

彼は護衛騎士ではあるが、明るくて、まるで犬のような愛嬌があるから接しやすい。

そのため彼が護衛してくれている際などは、こうして気さくに会話したりする仲だ。

「コッコさん。俺に堆肥たいひかけないでください！」

帝国で最も剣の腕が立つグレインが、畑の周りを飛び跳ねるコッコちゃんが巻き上げる堆肥たいひから逃にげている。

そんな情けない姿を見て、皇帝の懐刀である彼の実力を怪しんだ事も、実は少しだけあった。

しかし、彼が剣を振るう時の真剣な様子を知る今は、護衛としてとても信頼を置いている。

「さて、グレイン。畑を耕すのを手伝ってくれる？ 今日中に終わらせたいの」

「もちろんです！ やりましょう！」

皇后らしくないだろうが、土にまみれて一通り畑を耕たがやしていく。

以前に使用人が喜んでくれた声を思い出して、次はなにを植えようかとやる気がみなぎる。

趣味程度に始めた菜園だけど、やってみれば案外楽しいものだ。

なんて……思っていた時だった。

「カーティア様、少しお下がりにください」

ポツリとグレインが小さく告げ、私はクワを持つていた手を止める。

どうしたのかと振り返れば、グレインは腰に差した剣の柄に手を当てていた。

彼が鋭い目で見つめる先には、こちらへ悠然と近づくと豪華なドレスを着た女性の姿があった。

この城の庭園には、許可なく立ち入れはしないはずなのに……

「その令嬢。近づく前に名前を……許可なく我が帝国の皇后様に近づくな」

グレインの諫めるような言葉を受けて、その女性は一タリと立ち止まる。

近づいて分かったが、女性は人形のように華やかな顔立ちをしていた。

アメジストのような紫の瞳に笑みを添え、蒼色の髪をなびかせてカーテシーをする。

「失礼いたしました。まさか、貴方がカーティア皇后様だったなんて」

その女性は、こちらをはつきりと見つめながらクスクスと笑った。

——瞬間、グレインがその女性の眼前に詰め寄り、冷たい瞳で問いかけた。

「名を言え……皇后様の御前だと分からないか？」

「あまりに皇后様らしからぬ振る舞いをしていた方でしたから……私はマーガレットと申します。

お見知りおきください」

名乗られたけれど、分からない事ばかりで困ってしまうわね。

「あの……誰でしょうか？ この庭園にどうやって入って……」

「父に頼み、無理を言って入れてもらったのです。どうしても皇后様にお会いしたかったから」

「私に？」

「ええ。私はバジルア公爵家の娘ですの。ここまで言えば分かるかしら？」

バジルア公爵家の名に心当たりはあった。

しかし今はそれより……凄く気になる事があった。

「どうでもいいけど、畑に足を置かないでくださる？ せっかく耕したのに」

「た、耕した!? なにを言って……まあ、いいわ。私はただ貴方を呼ぶために来ただけだもの」
私を呼びに来たとは、どういう事だろうか。

疑問を抱く私に、マーガレットは薄い笑みを浮かべて手を差し伸べてくる。

「貴方に来てほしい所があつて、父に無理を言つて庭園に入らせてもらったの。私についてきてくれないかしら？ 我が公爵家とも友好的なお話をするのは、皇后として有益ですよ」

「え、嫌です。畑作業が残っていますから」

きつぱり断れば、彼女は戸惑いながら私を見つめる。

「……は？ 公爵家より畑が優先とでも言う気なの？ なにを言つて——」

「皇后様はお断りするとおっしゃっているの、お引き取り願えますか」

そうそう、グレイン、追い払つてちょうだい。

なんだか知らないけれど、突然やってきた令嬢にホイホイついていく程に暇ではないのよ。

こっちは庭園での作業に忙しいのだから！

「本当にいいのかしら？ 私の父は今、シルウィオ陛下に謁見していますの。その場にカーティア皇后様も来てくださらないと、後で後悔するのでは？」

なにやら引つかかる物言いに、私は首を傾げる。

「どうして貴方の父とシルウィオの謁見に、私がいる必要が？」

「それはもちろん……きつと今頃、貴方が皇后に相応しくないと父が忠言しておりますもの」

「はい？」

「あらあら、二度も言わないと分からないのかしら。その土にまみれた身なりの貴方を見て、私は確信を抱きましたわ……貴方は皇帝陛下の伴侶に相応しくないとね？」

私を挑発して、怒りを誘っている？

いや、この口調や嘲笑は本気で言っているようね。いい度胸じゃない。

私は初めてマーガレットへと向き直った。

「それで、私を謁見に呼んでどうする気なの？ それだけ馬鹿にしながら呼びつけるなんて」

「もちろん、陛下の前で見比べてもらうの。どちらが皇后に相応しいのかを、改めてね」

「……は？」

思わず、すっとんきような声を上げてしまう。

この人は何を言っているの？

「陛下はきつと、貴方で我慢しておられるわ。本心では他国の女性でなく、帝国生まれの純血の貴族を妃として迎えたかったはず」

ああ駄目だ、恐らくこの令嬢は典型的な“お貴族様”タイプだ。

私の故郷であるグラナート王国にも腐る程にいた、貴族令嬢として甘やかされて育ったお嬢様。無礼である自覚もなく、自らの主観にもとづいて傲慢な主張をしているのだろうな。

「陛下は少し怖い方でしたので、相手がおらず。貴方しか迎えられなかったのでしょうか」

ほらきた、不敬だなんて自覚もない煽り。

虚飾にまみれて生きる令嬢の、根拠なき自信からの言説には呆れてしまうわね。

「私も以前のシルウィオ様が怖くて逃げてしまった身ですが……以前に貴方の傍で、優しく振る舞っておられたのを見て、今の陛下となら安心して添い遂げられそうだと思えたのです」

「そう、謁見の場に行く前に聞いておくわ……貴方はなにを要求しようというの？」

「陛下のため、皇后を譲ってくださいらない？ 土にまみれた貴方より、陛下は美しい帝国公爵家の私を娶りたいはず、なによりもそれが国益のためとなるの」

国益……ね。

本当に呆れてしまうわ、自分自身の立場を客観視できない令嬢をたくさん見てきたけど、彼女も同じね。

私はマーガレットの傲慢さを鼻で笑ってしまった。

「な、なにがおかしいのよ」

「無知とは幸せだと思ったのよ。くっだらな虚飾の中で生きていて、不幸にすら思うわ」

「はい？ 馬鹿にしているのかしら？ 私は帝国でも由緒正しき家系であるバジリア公爵家の令嬢なのよ？ いくら貴方が皇后とはいえ、公爵家との仲を軽視していいわけが……」

「情けないわね……自分の家のことも知らないなんて」

「は？」

意味が分からないと首を傾げているマーガレットだけど、まあ無理もないわね。

私は皇后としての責務を分かっており、有事の際に備えて帝国貴族の事情は調べている。

ジェラルド様の情報網もあるおかげで、彼女が誇っているバジリア公爵家の今の立場が危うい事

も知っているのよね。

「バジルア公爵家の当主様は、シルウイオが皇帝に即位する前まで宰相を任せられていたとお聞きしております。確かに素晴らしい貴族家ね」

「え、ええ、そうよ。私のお父様は現陛下が即位するまで宰相を立派に務めていた方ですの。帝国貴族の中でも一目置かれてい存在なのよ。貴方が先程私を馬鹿にした言葉が許されると思って？」

「自信に溢れて、勝利を確信して微笑むマーガレットだけど、やはり知らないのね。」

「ここ数年、そのバジルア公爵家が支持を失い始めているのは気付いていないの？」

「……は？　そ、そんなはずが……」

「貴方の父上は、かつて確かに宰相を務めておりましたが……その役職を下りるキツカケを皆知り始めているのよ」

「キツカケ？」

「なにも知らぬお嬢様……いや、彼女の父親はわざと聞かせていないのだろう。」

「自らの不手際を、娘に教える父親などいないのだから。」

「宰相を務めていた際に、皇位継承者同士が争うのを止められなかった。その責任は重いと他の貴族も知り始めているの。貴方が思う以上に、バジルア公爵家の現在の立場は危ういでしょうね？」

「う……嘘よ。父は私にそんなこと一言も」

「そんな事も父に聞かねば分からないの？　どうやら貴方って皇后どころか、公爵令嬢としてもお粗末のようね」

「ちが、わ……私にそんな侮辱を吐いて……」

「あら怖い。でもこれで理解できたでしょ、さつさと去って」

「わ、我がバジルア公爵家を侮った態度、いくら皇后でも見過ごせないわ！　父から貴方に嚴重抗議をいたし——」

そんな言葉を吐きながら、顔を赤くしたマーガレットが前へ一步踏み出す。

彼女の足先を見つめた私は——

「なに畑を踏み荒らしているの？　いくら無知といえど許せない事があるわよ」

「なっ!？」

この令嬢、神経を逆なでする言葉ばかりではなく、なんとせっかく整えた畑をまた踏み荒らしたのだ。

なんて非常識、なんて無礼なの！

「あの……カーティア様。皇后の立場を譲れと言われた事よりも畑を荒らされて怒るのは、基準が間違っているような気がしますよ」

グレインが苦笑しながらも、私に迫っていたマーガレットの手首を掴み上げた。

「とはいえ、我らが帝国の華が大切にされている菜園を踏み荒らしたのです。これ以上の狼藉は認められない」

「ぐっ、は、放してよ！」

グレインに捕らえられたマーガレットは抵抗し、腕を振り上げて身をよじる。グレインは令嬢を

本気で拘束していたわけではないため、すぐに手を離れた。

だが不幸な事に、その際にバランスを崩した彼女はなんと……

積み上げていた堆肥たいひの上にダイブする形で、転んでしまったのだ。

「あ……」

「え……」

ここで堆肥たいひについて詳しく説明しよう！

牛糞などを発酵させて作る堆肥たいひは、農産物を育てるための栄養として非常に優秀なの。

でもね、さっきもグレインと話していたけど、それはほんのりと臭くて……

「きゃあああ!! なによ! なにこの臭い!」

とても貴族令嬢が嗅いだ事はない臭いだろうから、転んでドレスに堆肥たいひが付着したマーガレットは悲鳴を上げる。

もう滑稽な喜劇のようで、その姿に呆れながらも……

そう、いい事を思いついてしまったの。

「落ち着きなさい、マーガレット」

「これが落ち着いていられるというの!? こ、これってふ、糞でしょ? 私の身体に糞が!」

「そんな事より、私も考えを改めたの。先程のシルウィオとの謁見に同席する話。引き受けるわ」

「え……いま、今さらなにを言ってる?」

「貴方が言ったのでしょ? 見比べてもらうってね。さあ行きますよ」

マーガレットはぽかんとこちらを見てから、自らの汚れたドレスに数秒間視線を落とす。

そして私の思惑に気付いたのか、顔を紅潮させて首を横に振った。

「こ、こんな姿でなんてい、嫌よ! 無理、無理に決まっているじゃないの」

「そうは言っても貴方が言い出した事でしょ。グレイン……悪いけれど連行してもらえる?」

「承知いたしました! 連れていきます!」

グレインも私の思惑を理解しているのか、意気揚々とマーガレットの手を掴んだ。

彼女はいまさら懇願するように、私へ向き直る。

「あ……あの。私も言いすぎたわ、だからどうか今日は謁見の間に行くのは止めましょう? こんな姿で皇帝陛下の前になんて立てないわ」

「貴方が先程言った通り、畑作業をして土にまみれた私と同じ条件でしょう?」

「っ!? でもこのままじゃ、シルウィオ陛下に選んでいただいた時に……抱きつけないわ」

いや、まだ理解できてないのか。この人は……

「……言っておくけど、堆肥たいひに汚れていなくとも結果は変わらないわよ」

「は? なにを根拠に言っているの。由緒正しき公爵家を取り入れるのは政策的に見ても——」

「貴方たちはシルウィオを恐れるあまり、知ろうともしなかったのね。あの人は……そんな些事で判断を変えないわよ」

本当になににも知らないのね。

シルウィオの心境と、彼を侮あなづった末にどのような結果となるかを……

マーガレットの話では、既に彼女の父とシルウィオは謁見をしているはずだった。

しかし玉座の間に辿り着くと、ジェラルド様と見知らぬ男性が大扉の前に立っていた。まだ謁見は始まっていないらしい。

「カーティア様？ どうしてここに？」

「ジェラルド様、庭園に見知らぬ女性が現れて意味不明な事を言うので身柄を引き渡しにまいりましたよ！ シルウィオにお伝えください」

「い、意味不明だなんて！ 私に向かってなんて言葉を――」

「黙れ、貴方こそ我らが皇后に向かって無礼な口をきくな」

私に向かって温和な笑みを浮かべていたジェラルド様が、マーガレットに対して鋭く言葉を告げたことで、その場の雰囲気張り詰めた。

まさに一喝と言っている、威厳あるぴしゃりとした声だった。

「あ……わ、私……ちがうの」

どうやらまた言い訳の言葉を吐こうとしていたマーガレットだけ……

ジェラルド様と共に立っていた見知らぬ男性が彼女の身を引き、口を挟んだ。

「カーティア皇后、お初にお目にかかります。バジルア公爵家の当主を務めております。ヴォーレ

ン・バジルアと申します。此度は我が娘がとんだ無礼を……」

「貴方がマーガレットの父ですね」

「どうぞ、ヴォーレンと気軽に呼びください」

ヴォーレン・バジルアと名乗ったのは、初老に差し掛かった男性だ。

綺麗に整えた髪には白髪が交じり、深いしわが刻まれた顔には余裕そうな笑みを浮かべている。

マーガレットが先も誇っていた通り、彼はシルウィオが皇帝に即位するまで宰相であった。

しかし、当時激しさを増す皇位継承争いを止めずに放置した事で、その立場を追われている。

過去を知るからこそ警戒して見つめるが、彼はにこやかに礼をする。

「いと気高き皇帝陛下を敬称もなく呼ぶ姿。紛れもなく皇后様であられる。我らが皇帝陛下に大切になされる存在ができたこと、大変喜ばしく思います」

「挨拶は必要ありません。マーガレットから貴方は既にシルウィオと謁見をしていると聞いていたけれど、玉座の間の前でいったいなにを？」

「もちろん、貴方をお待ちしておりました。陛下と謁見するためにもです」

「……どうということ」

思わずジェラルド様を見つめるが、彼も分からぬというように首を横に振る。

「ヴォーレン、先程お話しした通り、シルウィオ陛下は貴殿との謁見を断っております」

「ええ、そうでしたね。ですが事情が変わりました。我が娘が皇后様に無礼を働いたのです。早急に謝罪をさせていただきたい。直接、お二人に謝罪せねばなるまい」

まさか……

マーガレットが私に無礼を働いた事を逆手に取って、その謝罪といった形をとってまでシルウィオと謁見しようというの!?

どうやらこの公爵、とんだ食わせ者のようだ。

「謝罪が遅くなれば、より話がこじれてしまいます。それは帝国の治安を統括する……宰相のジェラルド様のご負担でもありませんか？ 私も過去同じ立場にいたので分かりますよ」

「……御託(ごたつ)をべらべらと並べるな。カーティア皇后様を利用して、陛下と謁見する気か？」

ああ、やはり私以上にジェラルド様の方が思惑に氣付いている。

そして私が利用された事に、本気で怒りを示してくれていた。

「利用とは人間が悪い。こちらは誠意ある謝罪がしたいだけで——」

「……なにを考えているか知らないが、謝罪の場を望んだのは貴方だ。それを理解して待たれよ」
マーガレット同様、ヴォーレンはシルウィオの事を知らなすぎる。

自分で言うのもなんだけれど、私に無礼を働いたことへの謝罪をするなど……どんな場になるか。
「カーティア様、申し訳ありませんが同席していただけないでしょうか。シルウィオ陛下もきっとお望みになられるでしょうから」

「はい、ジェラルド様。元は私が彼女に応えてしまったがゆえの結果。同席しない訳にはいきませんよね」

私とジェラルド様、そしてマーガレットを連行していたグレインも含め、三人は視線を合わせる。

皆が思う事はきつと一つだ。

きつと今日は大変だぞ……止められるだろうか。

満場一致のそんな考えと共に、シルウィオとヴォーレンとの謁見が準備された。

さて、早速始まったのはいいけれど……

「シルウィオ陛下、我が娘のマーガレットがカーティア皇后様へ働いた無礼をまずお詫(わづ)びさせ——」
「黙れ、謝罪は必要ない。その女が……俺がカーティアのために用意した庭園に無断で立ち入ったのか？」

開口一番、シルウィオは謝罪を切り捨てた。その声は怒りに染まっている。

瞳は鋭く、今にも紅の瞳と同じ色の鮮血が玉座の間を汚しそうな勢いだ。

謝罪の対象である私は彼の玉座の隣に座っているが、この場をただ見守るだけだ。

ここからは皇帝陛下の意向のみが優先される。私の意見は必要ないだろう。

シルウィオなら分かってくれて、怒ってくれるだろうから。

「も……申し訳ありません。陛下、ですが今はこちらの謝罪をぜひお聞きください」

「その女。カティの庭園に無断で立ち入ったのは、相応の覚悟があつてのことだろうな？」

「ひっ……お、お父様。聞いていた話と違うわよ」

「お、落ちてマーカーレット。まずは冷静に話し合う機会を陛下に求めて——」

「先程から、誰に許可を得て喋っている。お前……」

シルウィオが手を動かした途端、ヴォーレンの腰に差されていた剣が浮かび上がる。これはシルウィオの魔法によるものだ。

魔力で浮かんだ剣の切っ先が、ヴォーレンの首先に紙一重の距離で突き付けられた。

「っ!？」

「俺は今、カティのために用意した庭園を荒らした狼藉者に用がある」

謁見前は冷静だったヴォーレンも、今のシルウィオを見て驚きを隠せないでいる。

普段は無表情で感情を表さないシルウィオが、ここまで怒りを示すと思っていなかったのだろう。きつと後悔しているだろうな、だからジェラルド様も釘を刺していたのに……

「ご、ごめんなさい……私の方が、カーティア皇后様よりも相応しいと思って」

圧倒されている父の隣で、娘のマーガレットが空気を読まずに、場違いな言葉を吐く。

私はこの先の展開を思っ頂垂れてしまった。

ああ、ヴォーレン。貴方はなにかを企てるよりも前にまず、娘の手綱をよく引いておくべきだった。

今ここで「皇后に相応しいのは自分だ」なんて言葉が、どれだけシルウィオの神経を逆なでするか。

「ひっ! きゃあああ!」と悲鳴が聞こえるが、もう見るのが怖い。

仕方なく視線を上げれば、マーガレットの美しい髪がバツサリと切り落とされていた。

シルウィオは無表情のまま、冷酷な瞳を彼女へと向ける。

「……黙っている。誰がカティより皇后に相応しいだど？」

「あ……あの……」

「俺はカティ以外いらぬ。ふざけた問答をさせるな」

最初からシルウィオの答えは分かっていたけれど、私だけと言葉にしてくれる事が嬉しい。ここにいていいと、肯定してもらえぬのは胸が安堵に満たされるものだ。

「陛下……今一度、我が娘の非礼を謝罪させてください」

ヴォーレンは跪いて皇帝へ頭を下げる。

この謝罪は先程までの口先だけのものではない、本気で許しを乞うものだ。

公爵家という権威を守るためでもあると、その態度で分かった。

「謝罪は必要ないと、まだ言わせる気か？」

「っ!？」

しかしあっさりとヴォーレンの謝罪は拒否され、彼は額に汗を流す。

目の前に立つ皇帝シルウィオの威圧を感じて、異を唱える事もできるはずがないだろう。

その決定には逆らえないという事が、温度のない瞳を見れば理解できるはずだから。

しかし……ヴォーレンはやはり強かだったようで、ここで謁見を望んでいた狙いを口にした。

「一つ、陛下へ進言したいことが……」

「……」

「無言は発言の許可と受け取らせていただきます。まずは陛下が現皇后を寵愛なさっている事は、

重々承知できました。今のお姿を見れば明らかだ」

「……」

「しかし、我らがアイゼン帝国貴族の中には……皇帝と、純血のアイゼン帝国貴族との間に次代皇帝を設けるべきだと考えを持つ者が多くいるのも、また事実だ」とご存知のはず」

「なにが言いたい」

私はヴォーレンの言いたい事に、おおよその察しがついてしまった。

他国から嫁いだ私にとって、少し耳が痛い問題だ。

ここアイゼン帝国は長い歴史を持ち、純血思想が強い貴族が多い事は私も知っていた。

現に貴族の中では、シルウィオに逆らう者こそいないが……伝統ある皇族の血筋に他国の血が混ざるのを嫌う派閥があり、それはきつと皇帝であるシルウィオも把握しているはず。

「もちろん、現皇后様に文句などありません。しかしながら、今後も多くは帝国貴族との関係をより安泰とするためにも、我が娘……マーガレットを側室へ迎えていただくのはいかがでしょうか」

ここまでヴォーレンが無礼な話を切り出したのは理由があると思う。

それはシルウィオの父——前皇帝は好色であり、何人もの側室を抱えていた事実があるからだ。

側室制度が認められているからこそ、シルウィオも側室を抱えると確信しているのかも。

「……側室だと」

「皇族に他国の血が入る事を望まぬ貴族もおります。このまま余計な動乱を起こすのではなく。どうか帝国の安泰のため……我が娘を側室として、御子をお作りください」

「それで、お前の娘を引き取れと？」

「自慢の美貌を持つ娘です……それに帝国では他に誰もいない希少な紫色の瞳を持つのです。側室となってお傍にいれば、きつと皇帝陛下の心を虜にできましょう」

ヴォーレンがマーガレットを庭園にけしかけてまで、謁見を望んだ理由が分かった。

自らの娘を政略的に益があると説得して、側室に娶る（めと）ように提言をしに來たのだ。

確かに国の運営という目線であれば、彼の口上にも一定の利はあるのは確かだ。

「なにより、貴方が即位されるまで……醜（みにく）き血の争いとなった皇位継承争いを、当時の宰相として止められなかった責任を私は重く受け止めております」

「……」

「宰相の立場を失った事に異論はありません。ですが元宰相として……改めて私はアイゼン帝国の平和を望んでおり、陛下の治世を安定させたいのです！」

かつての贖罪（しぐんざい）、そして忠誠を誓うような言葉の連続。

ヴォーレンは勝機を見出したような、商談を成功させる間際の商人のような笑みを向けた。

「いかがでしょうか、陛下。我が娘を側室とする事には帝国に多大な益がある。それをご理解いただきたいのです」

確かに、ヴォーレンの言う事には利がある。

ただどね、シルウィオは皇帝として……利だけで判断していなかった。

「黙れ」

「……………へ？」

「貴族が不満を抱いているだと？ 誰が……カティが皇后に相応しくないと評価している？」

「へ、陛下。これは貴族の多くが純血を望んでいて……」

「隣国グラナートで起こった動乱を無事に収めたカティが、現皇后である事に誰が不満を抱いているのか、答えてみる」

玉座の間にいた全ての者が慄くほどに、シルウィオの眼光が鋭くなっている。

なのにヴォーレンは察しが悪いのか、わざとなのか、抵抗の意を示す。

「お待ちください。確かにカーティア皇后様を信頼なさっているのは承知しております」

「それを理解したなら、もう口を開くな」

「しかし……お言葉ですが、皇后様はグラナート王国で廃妃となったというではありませんか。そのような皇后様だけを寵愛すれば不満に思う者もいるはず」

ヴォーレンは……あまりにシルウィオを舐めすぎている。

周囲に控えていた皆が私と同じ考えを抱いただろう。

もし私の事を不満に思っていたとしても、実際にシルウィオに仇成す貴族がいるならば、とんだ命知らずだけだ。

シルウィオの恐ろしさをなにも知らず、再び口を開いたヴォーレンに、皆が分かりやすく視線を落とした。

「我が娘は、確かに皇后様へ失礼な発言をいたしました。しかし……それは陛下を想う愛があるか

らこそなのです！」

「……………」

「それに私もかつて宰相であった立場だからこそ……皇族へ不満を抱き、仇成す貴族が生まれるやもしれぬと憂いており、マーガレットを側室として捧げて国を支えようとしているのです」

私が帝国貴族であるならば、皇后が誰であろうと異を唱えはしないだろう。

きっとこの場の、ヴォーレン以外の皆が同じ考えを抱くはずだ。

シルウィオの力を知る者たちにとって、彼と敵対するなど考えられるはずない。

シルウィオだけではない。彼に仇成せば帝国騎士グレインや、現宰相ジェラルド……忠義の厚い二人もいるのだ。

命が一万個あっても足りないわよ、どんな強敵たちだ。

なにより、シルウィオは貴族たちに恐れられてはいるが、その統治は素晴らしい程に完璧だ。

長年続いていた貴族の腐敗を正して、帝国の民は多くの幸福を手に入れ、国力は上がっている。

それを知る者にとっては、シルウィオへの謀反をほめかすようなヴォーレンの言葉は怒りさえ覚える内容であり、玉座の間では今にも剣を抜きそうな程、険しい雰囲気、騎士すらいた。

そんな事も知らず、ヴォーレンはいまだ意気揚々と言葉を続ける。

「我が娘マーガレットと子を作れば反抗勢力など出ませぬ！ どうか側室へと抱えてください！」

「……………」

「必要であれば、マーガレットと共に私も再び宰相にしてください……アイゼン帝国はより安定